

韓国語における補助動詞

—日本語との対照をも添えて—

呉 美 善

いわゆる「ことば」を勉強するとなると、いたるところで「用語」（特に、文法用語）に出会う。母国語の場合は勿論のこと、外国語となると、その複雑さは予測を許さない。一般的に、韓国語と日本語は非常に似ていると言われている。あまりにも似ているので、同じだとまで思い込んでしまっている人も少なくない。このような傾向は、韓国人の日本語学習、あるいは日本人の韓国語学習を助けることもあるが、妨げになることもある。同じように使われている用語の場合は後者になることが多い。片方の国だけに存在するものなら、その意味・用法を覚えれば簡単に済むかも知れないが、両方にありながら、それぞれ違う用法を持っているものの場合は、使いこなすまでに相当な時間と努力が要る。安易に母国語を基準としてあてはめたりすると、予想外の混乱が起こり、意味がつかめなくなる場合もある。両国語の対照研究においてはこのようにずれのあるものが大きな課題の一つになっている。本稿では、まず、その中の一つである「補助動詞」という語が両国語でどのように用いられているかを整理する。次に、韓国語の補助動詞の歴史およびその種類を調べる。第三に、複合動詞の後項動詞として論議の多い韓国語の五種の補助動詞の意味・用法を日本語との対照を添えながら分析する。

1. 補助動詞とは

英語の Auxiliary verb は、日本語でも「助動詞」、「補助動詞」と訳されているし、韓国語でも「助動詞」、「補助動詞」と訳されている。まず、英語の Auxiliary verb の辞書の記述を参考にしてみよう。

a verb that helps form tenses, aspects, moods, or voices of other verbs, as have, be, may, can, must, do, shall, will.

(Webster's New world dictionary)

Auxiliary verb は、他の動詞についてその動詞の時・法・態を作る。独立して用いられる時の意味が薄くなり、形式的なことばになっている。また、大体の

Auxiliary verb は元の動詞としての語形変化が不完全あるいは変則になっている。

日本語の助動詞は、独立しては用いられず、主に用言に接続して、意義を補い、あるいは表現者の判断を表すものである。一方、日本語の補助動詞は形式動詞とも言われるもので、本来は独立して用いられていたものがその実質的な意味を失い、他の語について形式的・補助動詞的に用いられるようになった動詞をいう。つまり、日本語の補助動詞、助動詞は同じく Auxiliary verb の訳語ではあるが、それぞれ違うものをさしている。独立しても用いられる英語の Auxiliary verb の働きを考えると、日本語の場合は常に他の語に接続した形で用いられる（「なり」「たり」「ごとし」「だ」「です」の類以外は常に用言に接続する）助動詞よりは補助動詞の方が Auxiliary verb に似ている。（注1）

韓国の国語辞書で「助動詞」の項目を引くと、大体次のような説明に会う。

（注2）

① = 補助動詞

② 英文法で、他の動詞に付き、その動詞の時・法・態を作る動詞

つまり、韓国語では Auxiliary verb は助動詞とも補助動詞とも訳されているが、助動詞の方を使うことが多い。韓国語の補助動詞はその働きが、本来の意味と独立性が失われ、他の語について付属的に用いられるもので、Auxiliary verb の性格に似ている。助動詞という用語は、従来は補助動詞と用言の活用語尾を合せたものであったが、最近は補助動詞と同じ意味・用法を持つものとして扱われる。

では、韓国語では補助動詞、助動詞が同じ意味で使われているし、またその働きも日本語の補助動詞に似ているということは何を意味することであろうか。日本語の助動詞のようなものの韓国語での不在を示唆するものなのか。これを明らかにするためにも韓国語の補助動詞、日本語の補助動詞、助動詞をそれぞれ調べる必要がある。本稿ではその第一段階として、韓国語の補助動詞を調べることにする。また、次の段階への進行のために日本語との対照をも添える。

2. 韓国語の補助動詞

韓国語の補助動詞は、本来の意味と独立性が失われ、他の動詞について付属的に用いられるもので、助動詞とも言われている。本稿では定説に従い、補助動詞の方を用いることにする。韓国語で補助動詞と助動詞とが同じ意味・用法を持っているところは、それぞれ別の意味で使い分けられている日本語とまぎらわしい。しかし、韓国語の補助動詞と助動詞とが同じ意味・用法で使われるようになったのは最近のことである。補助動詞に関する記述は「助動詞」という名称で文法書にその姿を現わす。崔光玉の『大韓文典』（1908年）に助動詞という用語が見えるが、ここでの助動詞とは用言の活用語尾と補助用言を合わせたもので、現在通用している補助動詞よりその範囲が広い。現在通用している意味での補助動詞は、崔鉉培の『우리말 본』〔urimalbon〕（1937年）（注3）あたりからである。この本で崔鉉培は補助動詞の特質を

- 前の本動詞は活用するものである。
- 本動詞の方が主たる叙述機能を持つ。
- 補助動詞は本動詞に比べ補助的つまり付属的な機能を持つ。
- 本動詞と補助動詞の間には他の文章成分は入れない。

と述べ、この特質に準じて、次の13種27類の補助動詞の例をあげている。

- 1) 否 定 아니 하다 〔 anihada 〕
 못 하다 〔 mottada 〕
 말 다 〔 mɑ:lɿda 〕
- 2) 使 動 하다 〔 hada 〕
 만들다 〔 mandwɿlda 〕
- 3) 被 動 자다 〔 tɿfida 〕
 되다 〔 tweda 〕
- 4) 進 行 가다 〔 kada 〕
 오다 〔 oda 〕
- 5) 終 結 나다 〔 nada 〕
 내다 〔 nɛ:da 〕
 버리다〔 porida 〕

- 6) 奉 仕 주다 [tʃuda]
 드리다 [tʷurida]
 바치다 [patʃ'ida]
- 7) 試 行 보다 [pɔda]
- 8) 強 勢 쌓다 [s'atta]
 대다 [tɛɾda]
- 9) 当 為 하다 [hada]
- 10) 是認的代用 하다 [hada]
- 11) 仮 飾 채하다 [tʃ'ehada]
 척하다 [tʃ'ɔkada]
 양하다 [jaŋhada]
- 12) 過 機 번하다 [pɔɾnhada]
- 13) 保 有 놓다 [nott'a]
 두다 [tuda]
 가지다 [kadʒida]

この分類は、補助動詞の基本的な説明として長く用いられてきたが、最近では崔光玉の助動詞の場合と同じように、その範囲の面で問題点が指摘されている。韓国語学会の共同研究の報告によると、この13種の中には、意味や文法的な機能の全く異なるものまでが含まれているとのことである。(注4) 次のようなものが論議の対象になっている。報告には詳しい説明はのっていないが、それぞれに簡単な説明を加えることにしよう。

まず、否定의 아니하다 [anihada]、못하다 [mot'ada]、말다 [malda]は

먹다 [mɔkt'a] ↔ 먹지 아니하다 [mɔkdʒi anihada] ≪食べる ↔ 食べをしない≫

のように否定形にあたるもので、

그렇게 아니하다 [kwɔk'e anihada] ≪そのようにしない≫
 のように独立しても否定の意味を表すことができる。本来の意味が失われて用いられる補助動詞とは違うものである。

次に、いわゆる冠形詞形（日本語の連体形に当る）に接続するものは補助動詞から除外する。例えば、

가는 체하다 [kanun tʃ'ehada] ≪行くふりをする≫
の場合、체하다 [tʃ'ehada] 全体を一つの動詞とすれば、動詞 가다 [kada] ≪行く≫の冠形詞形である 가는 [kanun] の次に 체하다 [tʃ'ehada] という動詞が付いた形になる。しかし、日本語の連体形の次には修飾される体言が続くのと同じように、韓国語の冠形詞形の次には名詞のような体言が続くのが一般的な現象である。このような理由から冠形詞形に続く 체하다 [tʃ'ehada]、척하다 [tʃ'okada]、양하다 [ja:ŋhada] は不自然なもので、가는 체 [kanun tʃ'e] という名詞句に 하다 [hada] という本動詞が添加された形と考えた方がいい。

가는 체하다 [kanun tʃ'ehada] — (×)

가는 체 하다 [kanun tʃ'e hada] — (○)

使動의 하다 [hada]、만들다 [mandwilda] も

가다 [kada] ↔ 가게 하다 [kage hada] ≪行く ↔ 行くようにする≫

のような使役の形であるが、

그렇다 하다 [kurok'e hada] ≪そのようにする≫

のように独立しても同じような使動の意味を持つものであるから、本動詞とみた方がいい。

また、갔어야 했다 [kas'oja hett'a] のように前後両方に「았」[at] という時の表現（過去）が介入できるものは両方本動詞とみる。

가다 [kada] ↔ 갔다 [katt'a] ≪行く ↔ 行った≫

하다 [hada] ↔ 했다 [hett'a] ≪する ↔ した≫

是認の補助動詞として扱われた、가기는 하다 [kaginun hada] ≪行くことは行く≫の 하다 [hada] も補助動詞から除外した方がいい。この場合の 하다 [hada] は前の 하다 [hada] という動詞の意味をそのまま繰り返す代動詞の役割をするものである。つまり、가기는 하다 [kaginun hada] = 가기는 가다 [kaginun kada] である。

保有、被動の補助動詞も本動詞としての意味が強い。補助動詞説と本動詞説を
図解すると次のようになる。図の中の「○」は補助動詞として扱われるものを
さす。

種 類	補助動詞説	本 動 詞 説
否 定	○	×
使 動	○	×
被 動	○	×
進 行	○	○
終 結	○	○
奉 仕	○	○
試 行	○	○
強 勢	○	○
当 為	○	×
是認的代用	○	×
仮 飾	○	×
過 機	○	×
保 有	○	×

上述のように問題点のあるものを
除外し、進行、終結、奉仕、試行、
強勢の補助動詞だけにその範囲を狭
めた研究が最近多く見られるが、こ
れはまだ定説とはいえない段階のも
のである。しかし、理論的に無理の
ないものであるだけに、定説として
確立するのはそう遠くないことであ
ると思われる。また、この5種の補
助動詞を複合動詞の後項とみる論文
も多く見られる。これは複合動詞の
主流をなしている「動詞+動詞」の
形態には、

① 動詞の語幹+動詞

(傍線の部分が語幹である)

오가다 [o - gada] <<行き来する>>

오르 내리다 [oru - nerida] <<上がったり下がったりする>>

② 動詞の語幹+ 어 [o] (아 [a]) +動詞

끼어 들다 [k'io - dũada] <<入ってくる>>

들어 차다 [tũro - t'ada] <<入っていっぱいになる>>

③ 動詞の語幹+ 고 [ko] +動詞

탄고 나다 [t'ago - nada] <<生れつく>>

파고 들다 [p'ago - dũada] <<(物事を)掘り下げる>>

の三つがある。②の「動詞の語幹+ 어 [o] +動詞」の形は、次のような一部
の補助動詞の接続の形とも一致する。(— は語幹で、~~~~ は補助動詞)

밥을 다 먹어 버리다 [pabũl ta:mogo - borida] <<ご飯

を全部食べてしまう>

고기를 먹어 보다. [kogirul mogo - boda] <<肉を食べてみる>>

これは日本語と違うところである。つまり、日本語の場合、「舞いあがる」「話し合う」のような複合動詞は「動詞の連用形＋動詞」の形をとり、「帰っていく」「食べてみる」の「～いく」「～みる」のような補助動詞は「動詞の連用形＋て＋動詞」の形をとるという形態上の区別が見られる。韓国語の場合、形態が一致するというものの外に、複合動詞の要素の中には本来の意味が失われたり、薄くなったりした意味の変形が起るものがあるが、これと補助動詞の特質とがまた重なり、補助動詞と複合動詞の後項とを二つに分けることはなかなかできないことである。

崔鉉培の補助動詞には、複合動詞と重なる接統形態の外にも、「動詞の語幹＋게 [ke]＋補助動詞」、「動詞の語幹＋지 [ji]＋補助動詞」の形があるが、この三つの接統の形をとる13種の補助動詞全部を広義の補助動詞とし、いろいろと問題点が指摘されるものを除いた5種の補助動詞を狭義のとして区別した方がいいと思われる。また、狭義の補助動詞は複合動詞も構成できるものとする。

次の3では、5種の補助動詞それぞれについての意味・用法の分析を試みることにする。これらの分析は、5種の補助動詞の意味を心理的な面を表すという、「注4」の報告に従って行う。なお、分析の際には、独立の形および複合動詞の後項として用いられた例の考察を行ってから、補助動詞としての意味・用法を分析するという順を追う。これは、複合動詞の後項としての補助動詞の認定について考える際の基盤を作っておくためでもある。

3-1 「～오다 [oda]」と「～가다 [kada]」

動詞の中には移動の意味を表すものがある。달리다 [talida]<<走る>>、걸다 [kotŋ'a]<<歩く>>、날다 [nalda]<<飛ぶ>>のように移動の方法や様相を表すものもあれば、가다 [kada]<<行く>>、오다 [oda]<<来る>>のように場所の移動を表すものもある。あるものや人がある場所から他の場所へ

と移動することを表す動詞は、移動の始まる場所である出発点を示すことばやその移動の終わる場所である到着点を示すことばと一緒に用いられる。これに対し、移動の方法や様相を表す動詞は、出発点や到着点を示すことばと一緒に用いる必要はない。しかし、移動の方法や様相を表す動詞も次のように場所の移動を表す動詞と複合動詞になると、出発点や到着点を示すことばと一緒に用いられる。

(「本動詞+ 어 [o] (아 [a]) + 補助動詞」には〜〜線を引く)

학교에 걸어 가다 . [hakk'joe korɔ - gada] ≪学校へ歩いて行く≫ — 到着点 (学校へ)

집에서 날아 오다 . [tʃibesɔ nara - oda] ≪家から飛んで来る≫
— 出発点 (家から)

このように「~ 오다」と「~ 가다」は、方向性のない動詞と複合し、方向性の持つ複合動詞を作り出すことができる。また、場所の移動という意味の他に、動作の継続や状態の変化などを表す場合もある。

まず、ある事物が話し手の位置あるいは話し手の側へと近づく移動動作には、「~ 오다」を用いる。逆に、話し手の側から遠ざかっていく場合は「~ 가다」を用いる。

1) a. 철이는 이층으로 내려 오다 . [tʃ'ɔrinun i: tʃ'ɔŋwuro
nɛrjo - oda] ≪チョールは二階におりてくる≫

b. 철이는 이층으로 내려 가다 . [tʃ'ɔrinun i: tʃ'ɔŋwuro
nɛrjo - gada] ≪チョールは二階におりていく≫

1) a は、話し手の位置は二階で、チョールが二階の上の階から話し手の居る二階へと近づいてきたことを表す。1) b は、話し手の位置は二階の上の階で、チョールが話し手から離れて、二階へと遠ざかっていったことを表す。次の 2) の例文は、チョールが走って話し手の「나 [na]」≪私≫に近づいてくることを表す表現なので、話し手の側から遠ざかっていく「~ 가다」は用いられない。

2) a. 철이는 나에게 뛰어 오다 . [tʃ'ɔrinun naege t'wio -
oda] ≪チョールは私の方へ走ってくる≫ — (○)

b. 철이는 나에게 뛰어 가다 . [tʃ'ɔrinun naege t'wio -
gada] ≪チョールは私に走っていく≫ — (×)

2) b を正しい文にするためには、話し手の私の方から遠ざかっていけばいいから、「나에게」《私の方へ》ということばを、「그에게」《彼の方へ》のようなことばに変えればいい。

2) b'. 철이는 그에게 뛰어 가다 . [tɕ'orinun kwege t'wiɔ - gada] 《철은彼の方へ走っていく》 — (○)

以上のような場合は、いずれも話し手の位置が固定しているが、話し手が動いている場合は次のようになる。

3) a. 나는 학교에 걸어 오다 . [nanun hakk'joe koro - oda]
《私は学校に歩いてくる》

b. 나는 학교에 걸어 가고 있다 . [nanun hakk'joe koro - gago - itt'a] 《私は学校へ歩いて行きつつある》

3) の例文の場合、目的地は「学校」である。3) a は話し手の私が歩いて、目的地の学校に着いたことを表す。3) b は、話し手私が歩いて目的地である学校に向かっているが、まだ目的地に行く途中であることを表す。3) b' のように、話し手が目的地に向かって行きつつあるが、まだ目的地に着いていない場合は、「～ 오다」は用いられない。

3) b. 나는 학교에 걸어 오고 있다 . [nanun hakk'joe koro - ogo - itt'a] 《私は学校へ来つつある》 — (×)

目的地に着いた場合は、逆に「～ 가다」が用いられない。

4) a. 나는 학교에 걸어 와 있다 . [nanun hakk'joe koro - wa - itt'a] 《私は学校へ歩いて来ている》 — (○)

b. 나는 학교에 걸어 가 있다 . [nanun hakk'joe koro - ga - itt'a] 《私は学校へ歩いて行っている》 — (×)

次に、「～ 오다」と「～ 가다」は動作の継続を表すことができる。場所の移動を表す場合は「話し手の位置」が基準になるが、動作の継続を表す場合は、その文が用いられた時点が基準になる。その文が用いられた時点は「現在」ということばで表されることが多い。過去のある時点から現在まで動作が続いた場合は「～ 오다」が用いられ、現在からある未来まで動作の続きが予想される場合は「～ 가다」が用いられる。

5) a. 철이는 작년부터 열심히 공부해왔다 . [tʃ'ɔrinwɔn
tʃaŋnjonbutɔ jɔlʃimhi kogbuhe-watt'a] 《 Chol は今から一生
懸命に勉強してきた 》

b. 철이는 지금부터 열심히 공부해간다 . [tʃ'ɔrinwɔn
tʃigumbutɔ jɔlʃimhi kogbuhe-ganda] 《 Chol は今から一生懸
命に勉強していく 》

5) a で示された時間は、「去年」という過去から現在までである。現在から未
来への動作の継続の予想を表す「～ 가다」は用いられない。《去年から》とい
うことばを《今から》ということばに変えると、現在から未来への動作の継続を
予想することができるようになる。

次に、「～ 오다」と「～ 가다」は状態の変化を表すことがある。

6) a. 체온이 점점 내려 오다 . [tʃ'eoni tʃɔ:mdʒom nerjɔ-
oda] 《 体温がだんだんさがってくる 》

b. 체온이 점점 내려 가다 . [tʃ'eoni tʃɔ:mdʒom nerjɔ-
gada] 《 体温がだんだん下がっていく 》

「～ 오다」と「～ 가다」が状態の変化を表す場合は、正常の状態が基準に
なる。「～ 오다」は正常の状態に近づくことを、「～ 가다」は正常の状態か
ら離れることを表す。6) a は一時高かった体温がだんだん平熱に近づくことを表
す。6) b は体温が正常以上にだんだん下がることを表す。このように正常の状態
が基準になる場合は、「～ 오다」は望ましい方向を表し、「～ 가다」は望ま
しくない方向を表す。

場所の移動、動作の継続、状態の変化の他に、「～ 오다」と「～ 가다」に
は次のような意味もある。

7) a. 갑자기 슬픈 생각이 밀려 오다 . [kaptʃ'agi
sulpɔn seŋgagi milljɔ-oda] 《急に悲しい思いがこみあげてく
る 》

b. 슬픈 생각은 모두 밀려 가다 . [sulpɔn seŋgagɔn
mo:de milljɔ-gada] 《悲しい思いはみんな去っていく 》

7) a は、ある現象が自然発生的に出現することを表す「～ 오다」で、人間の

心理を表す表現によく見られる。つまり、「～ 오다」はある心理現象を人間が感じはじめることを表す。反対に、「～ 가다」は人間側に出現した感想がその人間から去ることを表す。

以上のように「～ 오다」と「～ 가다」の意味・用法を整理してみたが、進行の補助動詞は5、6、7、のものである。また、両者はある基準点が内在し、「～ 오다」はその基準点に向かって動作・作用が進行することを、「～ 가다」は基準点から別の方へ動作・作用が進行することを表す。(注5)

3-2 「～ 버리다」[porida]と「～ 내다」[neda]

まず、「버리다」[porida]は次のような意味を表す。

- ① 使えないものを捨てる。

쓰레기를 버리다 . [sluregirul porida] <<ごみを捨てる>>

- ② 見捨てる。

친구를 버리다 . [tɕʰingurul porida] <<友だちを見捨てる>>

- ③ 台無しにする。損う。

몸을 버리다 . [momul porida] <<体を損う>>

①の「버리다」はある具体的なものがもはや使えなくなり、元の場所から他の場所へと移すことを表す。「쓰레기」<<ごみ>>とか「폐물」<<廃物>>などが捨てられるものになる②の「버리다」は、「희망」<<希望>>とか「친구」<<友だち>>のような抽象的なものをそのあるべき場所から外すことを表す。例えば「친구를 버리다」は<<友だちを見捨てる>>→<<友情を見捨てる>>ことになり、「희망을 버리다」は<<希望を捨てる>>→<<絶望する>>ことになる。<<捨てる>>という具体的な動作の意味を表す①の「버리다」とは違って、②の「버리다」は「見捨てる」「見放す」「見離す」などと訳される。③の「버리다」は<<捨てる>>あるいは<<見捨てる>>のような動作の結果により、あるものがだめになることを表す。日本語と比べると、①と②の「버리다」は「捨てる」の枠に入るし、③の「버리다」は「台無しにする、損う」などになる。では、このような意味を持つ「버리다」が複合動詞になり「～ 버리다」という形になると、どういう表現を表すのか整理してみよう。(注6)

基本となる《捨てる》の意味で用いられる「～ 버리다」がある。

1) a. 종이를 잘라 버리다 . [tʃogirul tʃalla-borida] 《紙を切って捨てる》

b. 옷을 찢어 버리다 . [osul tʃ'idʒo-borida] 《服を裂いて捨てる》

この場合、前項動詞はどうやって捨てるのかという、捨てる方法や手段を表す。

1) a は「자르다」《切る》という方法で、1) b は「찢다」《裂く》という方法であるものを捨てることを表す。

次に、「～버리다」には「～てしまう」のように「버리다」の意味からすぐ類推できないものがある。いわゆる「終結の補助助詞」と呼ばれるものである。

2) a. 그는 가다 . [kunnun kada] 《彼は行く》

b. 그는 가 버리다 . [kunnun ka-borida] 《彼は行ってしまふ》

2) a は単にある動作が行われた、あるいは終結したということを客観的に表したものである。2) b は《彼は行く》という客観的な記述の他に、そのことに対する話し手の気持が含まれている。

3) a. 같이 가자고 말해도 、 그는 가 버리다 . [katʃ'i ka-dʒago ma:lh doɛkunnun ka-borida] 《一緒に行こうと言っても、彼は行ってしまふ》

b. 동생은 그 과자를 먹어 버리다 . [toɯsɛɣwn kwkwadʒarul moɣo-borida] 《弟はそのお菓子を食べてしまふ》

3) a、話し手は彼に“一緒に行こう”と言ったが、その話を聞いた彼は一人で行ってしまった。《彼は行った》という動作の終結は、話し手に「期待のはずれ」という結果をもたらす。「～ 버리다」という表現は話し手の「期待のはずれ」という気持ちを含む。こういう理由で、《一緒に行こうと言っても》という前提に、「그는 가다」《彼は行く》という客観的な記述が続くのは不自然な表現になる。

3) b の例文からは次のようなことがわかる。

○話し手は弟がそのお菓子を食べないことを願う。

○ 弟はそのお菓子を食べる。

○ 話し手の期待がはずれる。

それでは、次の例文はどうであろうか。

4) 나는 그 과자를 먹어 버리다 . [nanun ku kwadz
arwl mogo-borida] ≪私はそのお菓子を食べてしまう≫

この場合の「～ 버리다」は「期待のはずれ」とは反対に、≪食べる≫という動作により、話し手は「よかった」と思うようになる。つまり、感じていた負担感がなくなったことを表す。これは、日本語とは違うところのように思われる。

4)からは次のようなことがわかる。

○ そのお菓子が話し手にある負担感を感じさせる。

○ 話し手はそのお菓子を食べる。

○ 食べたことによりその負担感がなくなる。

3)の「期待のはずれ」の「～ 버리다」の主体は話し手とは違う人物であるが、4)のような「～ 버리다」の主体は話し手である。

以上のように、「～ 버리다」には「終結」という意味の他に、話し手の気持ちが含まれる。日本語の「～てしまう」にも「～ 버리다」と似たところがある。次は、「期待のはずれ」「具合の悪い状態になる」という話し手の心理を表す表現である。

① 彼女は試験に落ちてしまった。

② 彼女は狼に食われてしまった。

③ 茶わんを落としてしまった。

いずれも、話し手の期待に反する動作を表す。その動作は①②のように他の人やものによる場合もあるし、③のように話し手自身による場合もある。韓国語の表現と違うところである。

一方、同じく「終結の補助動詞」と呼ばれている「～ 내다」[neda]は、内に入っているものを外に出す、あるいは外に移すという意味の「내다」から来たことばである。

책상을 밖으로 내다 . [tʃ'eks'agwul pak'wuro neda] ≪机を外に出す≫

次のような「～ 내다」は内から外へのものの移動を表す。

1) a. 책상을 밖으로 끌어 내다 . [tʃ'eks'əɯl pak'uro
k' rɔ-nɛda] <<机を外にひっぱり出す>>

b. 좋은 물건을 골라 내다 . [tʃoun mulgɔnwul kolla-
nɛda] <<よいものを選び出す>>

前項動詞は内から外へものを移動させる方法を表す。1) aは「ひっぱり」という方法で、1) bは「選ぶ」という方法でもものを外へと移している。次は、1)のような「内から外への移動」を表す「내다」からすぐ類推できないもので、「終結の補助動詞」と呼ばれている例である。

2) a. 나는 그 책을 읽다 . [nanun kuw tʃ'ɛɯl iltt'a] <<私
はその本を読む>>

b. 나는 그 책을 읽어 내다 . [nanun kuw tʃ'ɛɯl
ilgɔ-nɛda] <<私はその本を読み抜く>>

2) aは単にある動作が行われたという客観的な記述で、2) bはむずかしいと思われたことを自力で成し遂げたという話し手の気持が含まれている。日本語の「勝ち抜く」「耐え抜く」のような「～抜く」に似た表現である。

2) bからは次のようなことがわかる。

○ その本を終わりまで読むのはむずかしい。

○ でも、私は終わりまで自力で読んだ。

このような理由で、「조금 읽어 내다」<<少し読み抜く>>などという表現は不自然である。<<少し>>を<<終わりまで>>あるいは<<全部>>などに変えると自然な表現になる。

3) a. 조금 읽어 내다 . [tʃogum ilgɔ-nɛda]
<<少し読み抜く>> — (×)

b. 끝까지 읽어 내다 . [k'utk'adʒi ilgɔ-nɛda]
<<終わりまで読み抜く>> — (○)

3-3 「～ 주다 [tʃuda]」

日本語には、ある事物の所有者Aから他者Bへとその事物の所有権が移ることを表す「くれる」「やる」「もらう」ということばがある。この三つのことばは、与え手A、受け取り手B、授受される事物Cの三者関係から、

A ⇨ B = Cヲやる

A ⇨ B (=私) = Cヲくれる

B ⇨ A = (カラ) Cヲもらう

のような使いわけが見られる。また、A・Bの上下関係から、

やる／あげる／さしあげる

くれる／くださる

もらう／いただく

のような使いわけもする。

「 주다 」[tʃuda] の場合は、「やる」「くれる」「もらう」のような、与え手A、受け取り手B、授受される事物Cの三者関係からくる使いわけは見られないが、

주다 [tʃuda] / 드리다 [tuɾida] / 바치다 [paɰtʃida]

のような上下関係からくる使い分けはある。

ここでは、主に「 주다 」の意味や用法について調べることにする。

나는 그에게 연필을 주다 . [nanun kwege jɔnp'irul tʃu
A B C

da] ≪私は彼に鉛筆をやる≫

어머니가 나에게 기쁨을 주다 . [ɔmɔniga naege kip'ummul
A B C

tʃuda] ≪母が私を喜ばせる≫

与え手Aは助詞「 이 (가) 、 온 (는) 」[i, un] で示される。受け取り手Bは、助詞「 에 게 」[ege] で示され、授受される事物Cは助詞「 을 (를) 」[ul] で示される。また、授受される事物には、≪鉛筆≫のような具体的なものもあれば、≪うれしさ≫のような抽象的なものもある。つまり、「 주다 」の用いられる文型は、

A 가 B 에게 C 를 주다 . [A - ga B - ege C - rul
tjuda]

になる。

「 주다 」が補助動詞になり、「 ~ 어 주다 」のような形になると、その意味は変わる。(注7) 「 주다 」の場合、AからBへと移るのは事物Cであるが、「 ~ 어 주다 」は、

- 1) A 가 B 에게 편지를 보내어 주다 . [A - ga B - ege
p'jondʒirul poneo - dʒuda] <AがBに手紙を送ってやる>

AからBへと移ったのは、Cである<手紙>ではなく、<手紙を送る>という<労>である。また、<手紙を送る>行為はBのためにやったことである。「 ~ 주다 」が「奉仕の補助動詞」と呼ばれているのは、このようにある行為を表す動詞に付いて、その動詞の表す行為を、行為主体であるAがBのために行うという意味を持っているからである。

- 2) a. 내가 그에게 연필을 주다 . [nega kwege jɔnp'irul tʃu
da] <私は彼に鉛筆をやる>

- b. 내가 그에게 연필을 깎아 주다 . [nega kwege jɔn
p'irul k'ak'a - dʒuda] <私は彼に鉛筆を削ってやる>

2) a の場合、<私>から<彼>に移ったのは、<鉛筆>である。2) b の場合は、<鉛筆を削る>という行為をAの<私>がB<彼>のために行う労をとることを表す。

では、どのような動詞が「 ~ 어 주다 」の形になれるかを調べてみよう。

「動詞 + 어 + 주다」の構造はその与え手であるAが意図を持って行動する行為者でなければならない。AからBに移るのは、A自身の労で、この労はBのために行われる。

- 3) a. 그는 마루를 더럽히다 . [kɯnnun marurul tɔrɔp'ida]
<彼は廊下を汚す>

- b. 그는 마루를 더럽혀 주었다 . [kɯnnun marurul tɔrɔp'io
- dʒuda] <彼は (私のために) 廊下を汚してくれる>

3) a は、彼がした行動をそのまま描写したもので、3) b は行為者である彼が私

の願いを満してくれたという意味を表す。3) a の行動は他の人に害を与えるものになるが、3) b の行動はそうでない。

4) a. 이상한 사람이 보인다 . [isaphan sarami poida] 《変な人が見える》

b. 이상한 사람이 보여 주다 . [isaphan sarami pojjo - dzuda] 《変な人が見えてくれる》 — (×)

「 보인다 」《見える》の主語「 사람 」《人》は行為者ではない。「 보이 다 」のような動詞には「 들리다 」《聞える》、「 아프다 」《痛む》などがあるが、4) b の例のように「動詞+ 어 + 주다 」の構造は成り立たない。しかし、自然現象を描写する動詞の主語は行為者ではないが、擬人化して用いられる。

5) a. 바람이 불어 주다 . [parami puro - dzuda] 《風が吹いてくれる》

b. 비가 와 주다 . [piga wa - dzuda] 《雨が降ってくれる》
次の6)に述べるような動詞には、「 그리다 」《なつかしむ》、「 바라다 」《望む》の他に、「 즐거워하다 」《うれしがる》、「 기쁘다 」《喜ぶ》、「 슬퍼하다 」《悲しむ》などがある。これらの動詞は、主語がある感情を感じて表すもので意図的にすることはできないものである。また、それを感じるのは主語の脳内で起こる内的な動きで、他の人に影響を及ぼすものではない。

6) a. 나는 고향을 그리워 해 주다 . [nanun kohjaɣwul kuriohe - dzuda] 《私は故郷をなつかしんでやる》 — (×)

b. 나는 그의 성공을 바라 주다 . [nanun kwe sɔŋgo ɣwul para - dzuda] 《私は彼の成功を望んでやる》 — (×)

主語の行動が意図的でない場合、「動詞+ 어 + 주다 」の構成が成り立たないということは、次のような例からすぐわかる。

7) a. 나는 그를 우연히 만나다 . [nanun kurwul ujonhi mannada] 《私は彼に偶然に会う》

b. 나는 그를 우연히 만나 주다 . [nanun kurwul ujonhi manna - dzuda] 《私は彼に偶然に会ってやる》 — (×)

「動詞+ 어 + 주다」の構造は意図的な行動を示すもので、「우연히」
 ≪偶然に≫のような意図的でないことを表すことばと共に用いられない。その
 かわり、「～ 주다」の入ってない㉠aは「우연히」ということばで、彼に会
 ったことが意図的でないことを表している、文法的にも正しい文である。

3-4 「～ 보다 [poda]」

日本語には、「目を向ける」という意味を表す「見る」「見える」「見せる」
 「ながめる」「のぞく」のようなことばがある。この中の「見る」と非常に似て
 いるものとして、「보다」[poda]があげられる。「보다」は、

1) a. 나를 보다 . [narul poda] ≪私を見る≫

b. 서쪽을 보다 . [sɔdʒ'ɔgʷul poda] ≪西の方を見る≫

のように単に視覚的な動作を表す場合もあれば、

2) a. 아침에 신문을 보다 . [atʃ'ime ʃimmunul pada] ≪朝、
 新聞を見る≫

b. 사전을 보면 금방 알 수 있다 . [sadʒɔnʷul
 pomjɔn kuɔmbaŋ al s'u itt'a] ≪辞書を見れば、すぐわかる≫

c. 내가 본 바로는 [nega pon baronʷn] ≪私が見たところで
 は≫

d. 아이를 보다 . [airul poda] ≪子供を見る≫

e. 많은 희생자를 보다 . [mɔːnʷn hisɛŋdʒarʷl poda]
 ≪多くの犠牲者を見る≫

≪読む≫≪調べる≫≪判断する≫≪世話をする≫≪出す≫などの意味も表す。

このように多くの意味を持つ「보다」は、「～ 어 보다」という形で、
 「試みに行う」という意味を表す補助動詞としても用いられる。いわゆる「試
 行補助動詞」と呼ばれるもので、「～てみる」とその用法が非常に似ている。

3) a. 좀 먹어 보다 . [tʃɔm mɔgɔ-boda] ≪少し食べてみる≫

b. 학교에 가 보다 . [hakk'joe ka-poda] ≪学校へ行って
 みる≫

この試みの動作は、(他の目的のため)“ために～する”という実験的な

ものである。3) a では、料理がうまくできあがったかどうか調べるために、あるいは味をみるためにちょっと食べるなどの「他の目的」が考えられる。b の場合は、家からどのぐらい時間がかかるのかを調べるためにとか、彼が学校に来ているか調べるためになど、他の目的のためにためしに～するという意味を表す。したがって、《考える》などのような意志性のある動詞に付くことになる。

- 4) 아무리 생각해 보아도 모르겠다 . [a:muri seŋgak'ε-boado morugett'a] 《いくら考えてみてもわからない》

「(꽃이) 피다」《(花が) 咲く》のような自然現象を表す動詞や、「(잠이) 깨다」《(目が) 覚める》のような無意志性の動詞に付いた「～ 보다」は、“ためしに～する”という意味ではない。

- 5) a. 피어 보니 , 그다지 예쁜 꽃은 아니었다 . [piə-boni kwdadzɪ jep'un k'otɕ'un aniott'a] 《咲いてみると、それほどきれいな花ではなかった》

- b. 아침이 되어 보니 , 열은 내려 있었다 . [atɕ'imi tweə-boni jorun nerjə is'ott'a] 《朝になってみたら、熱はさがっていた》

自然現象を表す動詞に付いた場合、「～ 보다」はその自然現象が成立した時点の状況を表す。5) a は《(花が) 咲く》という事態が成立した時点の状況が、《それほどきれいな花ではない》であることを表している。もう一つの例《朝になる》という事態が成立した時点の《熱がさがっていた》という状況を表している。

- 6) a. 깨어 보니 , 이불이 젖어 있었다 . [k'εə-boni iburi tɕodʒo is'ott'a] 《目が覚めてみたら、ふとんがぬれていた》

- b. 써 보니 , 파란색 볼펜이었다 . [s'ə-boni paranseŋk polp'enioott'a] 《書いてみたら、青色のボールペンだった》

人間の行為・動作に「～ 보다」が続く場合、前の動詞に意志性があると、「～ 보다」は(他の目的のために)“ためしに～する”という意味を表すが、前の動詞が無意志性のものであると、無意識のうちにに行った結果の状況を表すようになる。このようなことから、自然現象や無意志性の動詞に付く「～ 보다」は、

その自然現象の成立後の状況、あるいは無意識のうちにいった結果の状況を述べ
るという特性から、「～ 보다」のような「条件を表す形」をとることになる。
このことは5)と6)の例からもよくわかる。

3-5 「～ 쌓다 [s'att'a]」と「～ 대다 [tɛda]」

強勢補助動詞とは、前のものの意味を強めるために使うもので、「～ 쌓다」
と「～ 보다」があげられる。(注8)

まず、「～ 쌓다」は、特に慶尚南道地方でよく見られることばで、

1) a. 아이들이 와 쌓다 . [aidwuri wa-s'att'a] 《子供たちが
おおぜい来る》

b. 두 아이가 싸워 쌓다 . [tu aiga s'awo-s'att'a]
《二人の子供がひどくけんかをする》

c. 이 정도면 、먹어 쌓다 . [itʃɔŋdom jon mɔgo-s'att'a]
《この程度なら、十分に食べられる》

のように、《数が多い》、《程度がひどい、極度である》、《十分である》など
の意味を表す。また、動詞の他に、形容詞に付くこともある。

2) a. 그 물은 뜨거워 쌓다 . [ku murun t'ugowo-s'att'a]
《その湯は熱すぎる》

b. 그만 하면 、많아 쌓다 . [kuroman hamjon ma:na-
s'att'a] 《そのぐらいなら、もう十分だ》

この「～ 쌓다」の表す強勢の意味は、話し手の主観的な判断によるものであ
る。

3) a. 아이들이 오다 . [aidwuri oda] 《子供たちが来る》

b. 아이들이 많이 오다 . [aidwuri ma:ni oda] 《子供たちが
おおぜい来る》

c. 아이들이 와 쌓다 . [aidwuri wa-s'att'a] 《子供たちがお
おぜい来る》

3) a は単に《子供たちが来る》という事実を述べたものである。3) b の例は、
来る子供の数が多いということを表したもので、この《数が多い》と言える基準

は、一般的な基準、つまり大体の人なら数が多いと思うようなものである。bの例とは違って、cの「와 쌀다」は、話し手の主観的な基準によるもので、二人でも三人でも、話し手が多いと思えば、使える表現である。静かに何かやろうと思っている人なら、たった一人の子供でも、二人の子供でも、《数が多い》と言えるものである。これは、形容詞に「~ 쌀다」を付けた場合、もっとわかりやすい。

4) a. 그 물은 뜨겁다 . [ku murun t'ugɔ pt'a] 《その湯は熱い》

b. 그 물은 뜨거워 쌀다 . [ku murun t'ugɔwɔ - s'att'a]
《その湯は十分に熱い》

もし、「뜨거워 쌀다」の表現が客観的な程度を表すものなら、

뜨겁다 < 뜨거워 쌀다

という関係が成立するはずであるが、実際には必ず成立する関係ではない。これは、二つの表現の持っている基準の違いからくるものである。「뜨겁다」[t'ugɔpt'a]の場合、その基準は一般的に用いられるもので、大体の人はみんな熱いと感じる。「뜨거워 쌀다」の場合の基準は、「뜨겁다」のような一般的なものではなく、話し手の思うある特定の目的においての基準である。つめたいものが飲みたい人と、寒気がして熱いものが飲みたい人の基準は違うはずである。

5) a. 토끼의 귀는 길다 . [t'ok'ie kwɪnɪn ki:lɔda] 《兎の耳は長い》 — (○)

b. 토끼의 귀는 길어 쌀다 . [t'ok'ie kwɪnɪn ki:ɔ - s'att'a] 《兎の耳は十分に長い》 — (×)

名詞《兎》が何の修飾語も付けず用いられたので、これはある特定の兎を指すものではなく、総称的に兎という動物のことを表す。一般的に兎の耳は長いと感じるものであるから、aの表現は正しい。しかし、「길어 쌀다」[ki:ɔ - s'att'a]という、あるもののある目的においての話し手の主観的な気持を表すことばと、《兎》という動物の総称的なことばとの間には意味の差があるため、bの表現は不自然なものになる。

「～ 대다」[tɛda]は、動詞のみに付く、「～ 쌓다」[s'att'a]と同じく、話し手の主観的な見解を表す。

6) a. 날마다 놀아 대다 . [nalmada nora - dɛda] ≪毎日遊んばかりしている≫

b. 마구 떠들어 대다 . [magu t'ɔdwɔ - dɛda] ≪わめきたてる≫

4. 終 わ り に

「補助動詞」及び「助動詞」に対する韓国語、日本語の定義を基に、韓国語における補助動詞、特に5種の補助動詞を分析してみた。これらの補助動詞は複合動詞の後項であるかないかの論議のあるもので、使用頻度数も高いものである。実際の分析のように、韓国語では補助動詞と複合動詞の後項は、形態及び意味・用法の面で重なる部分が多く、二つに分けられないところがある。これは分かち書き(注9)からもうかがえる。5種の補助動詞から成るものは、넘 보다 [nɔmboda], 오르내 리다 [orɯnerida], 여닫다 [jɔdatt'a] のような「動詞の語幹+動詞」の複合動詞が分かち書きをしないのに対し、가 보다 [ka - boda], 보여 주다 [pojo - dʒuda] のように分かち書きをするのが普通である。これらの補助動詞とその形が同じである「動詞の語幹+어+動詞」と、「動詞の語幹+고+動詞」の形も人それぞれで、分かち書きをしたり、しなかったりする。複合語は一応分かち書きをしないようになっているのにもかかわらず、種類によって違うのは、複合の力の強弱に基因するもので、分かち書きをするのは複合の力の弱いことを表すものと思われる。以上のように、分かち書きでも補助動詞と複合動詞とは分けられない。これらを合わせて分析すると、5種の補助動詞もその複合の力は弱い^が、複合動詞の後項になれるということになる。日本語の複合動詞の中でも、補助動詞の要素を持つもの、あるいは補助動詞とも呼ばれる、「思い出す」の「～出す」、「書きあげる」の「～あげる」などのようなものがある(注10)という事実も見逃せないところがある。一応、形態の面から二つに分けられるが、意味・用法の面では問題点がみられる。

これらの問題は、複合語という概念は形態を中心にことばを見たもの、補助動

詞という概念は、両要素の内的構造、つまり意味関係を中心にことばを見たものというそれぞれの基準の違いからくるもののように思われる。基準がそれぞれ違うものを対立する概念のように扱うことはできない。

以上のようなことから、5種の補助動詞に対する複合動詞の後項との論議は解決できると思われる。問題になるのは、むしろ補助動詞一つ一つに対する意味・用法の個別的な考察のようで、これらの考察は外国語との対照研究にも用いることができるような基本的な、より公式化されたものでなければならない。本稿の手はじめとして今後は韓国語と日本語の対照研究を試みていきたいと考えている。

〔参 考 文 献〕

注1：国語学会編、『国語学大辞典』、東京堂出版。

注2：신기철・신용철 [singitʃ'ol, sinjogtʃ'ol]編、새우리 말 큰사말 [seurimal k'unsadʒon]、三省出版社。

注3：崔鉉培、『우리말 본』[urimalbon]、정음사 [tʃɔŋumsa]

注4：徐正洙、「국어의 보조동사」《国語の補助動詞》、『言語』3-2、韓国言語学会——韓国言語学会の共同研究の報告で、韓国語の補助動詞の範囲を決め、研究の例をあげている。

注5：이기동 [i:gidog]、「동사『오다』『가다』의 의미 분석」《動詞「oda」「kada」の意味分析》、『말』[mal]2集、延世大語学堂——「～오다」と「～가다」における「基準点」の存在を述べる。

注6：이기동 [i:gidog]、「조동사의 의미분석」《助動詞の意味分析》、『文法研究』3集、文法研究会——「～버리다」「～내다」「～쌓다」「～빠자다」[～porida, ~neda, ~s'att'a, ~p'adʒida]という補助動詞を話し手の主観的な見解を表す表現として扱っている。

注7：이기동 [i:gidog]、「“주다”의 문법」《“tʃuda”の文法》、『한글』[hangwul]166号、한글학회 [hangwulhak'we]——「～주다」[～tʃuda]をいろいろな文型によって考察した論文で、参考にした。

注8：注6に同じ。

注9：日本語とは違って、韓国語には分かち書きがある。

注10：動詞が複合動詞の後項要素になると、単独で用いられるときの意味が稀薄になって前項動詞に付属的な意味を添える場合が多く見られるため、他の複合動詞の後項と別のものであるとして扱うことがある。金田一京助氏は半ば助動詞化しているものに、時枝誠記氏是用言的接尾語に、佐久間鼎氏は準助動詞に、林和比古氏は補助用言の範疇に入れている。また、『日本語教育事典』（大修館）などの解説にも、補助動詞として扱われている。